



慢性痛診療に立ち向かった軌跡と そのエッセンスがここに

評者 矢吹省司 福島医大教授・疼痛医学

本書は、慢性疼痛患者を診療する医療者が参考にできる事例集が中心となっている。8章から成っており、1章「慢性痛を知る」、2章「慢性痛をどう評価するか」、3章「慢性痛の臨床—エビデンスの治療と原則」、そして4～8章「ケースブック」という構成である。

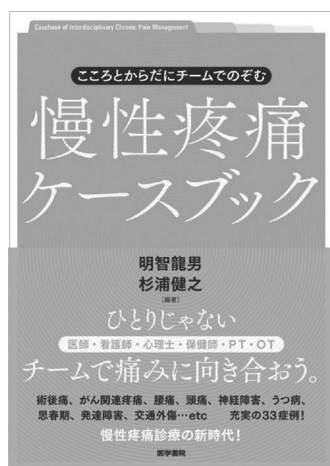
まず、慢性痛を理解し、どのように評価し、そしてどのような治療があるのかを1～3章で知ることができる。これらの章の各項目には「Point」があり、その項目のまとめが記載されている。そこを読んでいくだけでも、内容のある程度理解できるようになっている。そして4章「ICD-11分類に基づく慢性痛」、5章「精神疾患と併発する慢性痛」、6章「ライフステージと慢性痛」、7章「臨床で気を付けたい慢性痛」および8章「慢性痛診療のアプローチ」で、具体的に事例をあげて病態の評価の結果と、それをもとにどのような治療方針を立てるかについて記載されている。共通していることは、①一医師だけでは評価や治療では限界がある、②多くの専門家がそれぞれの視点で評価し、それをカンファレンスでディスカッションすることで的確な治療方針が見えてくる、そして③多面的に治療することで複雑な慢性痛であっても改善（痛みの程度そのものに変化がなくてもADLやQOLは改善）できる可能性がある、ということである。

難しい慢性痛診療に豊富な事例からヒントが得られる

事例の多くは、著者らの名古屋市立大学病院いたみセンターでの症例であると思われる。患者の生育歴を含め、さまざまな情報を収集し、各専門家が分析して診断し治療に結びつけている様子が実際にカンファレンスに参加しているように理解できる記載になっている。「Review—評価のポイントはどこだったのか」には、評価を行う際に考えた具体的なポイントが記載されており、とても参考になる。Case 1からCase 33まであり、読者は自分が関わっている慢性痛患者と似たCaseが見つかると思う。ところどころに「リソースが十分でない施設での痛み診療」という記載もあり、なかなか職種で診療にあたれない施設の場合の対応に関しても配慮されている。

慢性痛患者の病態をどう考えて、どのように治療方針を立てて、どう治療していくか、一律にいかないのが慢性痛診療の難しさである。著者らは苦勞してこのいたみセンターを立ち上げ、軌道に乗せてきたと思われる。われわれ読者は、そのエッセンスをこの本を読むことで得ることができる。悩みながら慢性痛診療に頑張っている医療者すべてに読んでいただき、明日からの診療に役立てていただきたい1冊である。

⑥



こことからだにチームでのぞむ 慢性疼痛 ケースブック

明智龍男、杉浦健之＝編著

定価：4,730円（本体 4,300円＋税 10%）
B5判・304頁／医学書院／2021
[ISBN978-4-260-04335-9]